

2025年12月14日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教64「御心のままに」

エレミヤ31：8～9、ヨハネ11：45～57

今日のところからヨハネ福音書は一気にイエスさまの十字架に向かってなだれ込むように展開して行きます。次の第12章ではもうエルサレム入城の話が出て来ます。エルサレムでの最後の一週間が始まります。四つの福音書いずれもイエスさまのご受難を語りますが、ヨハネは福音書の半分を受難のために割いています。これもまたこの福音書の大きな特徴であると申し上げてよいでしょう。

わたしたちの人生は多くの困難が伴います。何の苦勞もない、苦しみもない人生というのはあり得ません。苦しみは人それぞれですが、皆さんもそういう苦しみを抱えながら、痛みを抱えながら歩んでおられると思います。そしてそういう苦しみから逃れたい、そこから逃れることが救いだと考えます。ところが聖書はむしろこの苦しみの中へ深く入り込んでいきます。この福音書の半分が受難物語と申しました。それでは福音にならないと思われるかもしれない。イエスさまが苦しまれ、十字架で死んでいくことがどうして福音、救いなのか。

詩編23編で「死の陰の谷を行くときも」(23：4)とあります。わたしたちの人生は死の陰の谷を行くような現実があります。愛する者の死に直面する。病を経験する。そういう中でいつも死の陰、闇がつきまといます。けれどもイエスさまはそこに入って行かれます。死臭が立ち込めるラザロの墓に、死の匂いが漂う、誰もが顔を背けたくなるようなところへ。わたしたちはこれまでそういうものに蓋をして、見ないようにして来たかもしれません。そういう陰が付きまとうのだけれども、仕事に没頭することで、趣味や娯楽に没頭することでそういうものを忘れようとしてきた。しかしいくらそこから目をそらしても、何も解決していないのです。やがてそれに直面する時が必ず来ます。でもそこでこそイエスさまの救いが見えてくるのです。ああ、イエスさまはそこにおられた。そこでわたしと深く出会ってくださるのだ。

今日のところでユダヤ議会は、イエスさまを信じる人たちが増えてくることに脅威を感じています。それが当時ユダヤ社会を支配していたローマ帝国を刺激するのではないか。そこで大祭司カイアファが、それなら早くその恐れを摘んでおこうと、イエスさまを殺すことを提案します。「一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないか」(50節) 彼がこのように言うのは、自分たちの身を守るために、イエスさまを殺すことを正当化したのです。そのようにして、気に入らないイエスさまを殺すことの正当な理由付け、大義名分を作りました。

興味深いのは、ヨハネ福音書はここで説明のためにト書きを記しています。「これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである」(51節) この時カイアファは大祭司で重要な責任ある立場にいました。だいたい責任ある人というのは、政治家でもなんでもそうですが、何事も穏便に済ませようとします。物事を荒立てない。自分の任期中に何か不祥事が起こらないようにという思いが働く。民衆がイエスさまを信じるようになれば、ローマを刺激するかもしれないし、ことを荒立てないために、保身のために言ったことなのです。ところがこのカイアファが言ったこと、一人の人間が死ぬことで、国民全体が滅びないで済むというのは、図らずも聖書の伝

える救いを示すものとなりました。まさに預言となったのです。パウロもローマの信徒への手紙の中で次のように述べています。「一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです」(ローマ5:18) イエスさまの犠牲がわたしたち人類の罪を贖うことになりました。そこに聖書の伝える救いがあります。もちろんカイアフアにはその自覚はありません。ただ保身のためだったし、イエスさまを殺す口実を作りたいためだった。しかし、カイアフアの口から出た言葉は、結果として神さまの救いを示すものとなりました。

そういう人間の汚いよこしまな思惑もまた神さまの救いのために用いられていくという驚くべきことが起こっています。カルヴァンはこのように書いています。「かれ(カイアフア)の舌は、もっと高いところから動かされていたのである。それというのも、神がかれの口を通じて、かれが思いついたよりさらに崇高なあることを知らせようとしたからである」もっと高いところから彼の口は動かされていた。人間の思いをはるかに超えて神さまの御心が働いている。その御心をわたしたちが自覚する、しないに関わらず、神さまの救いのご計画は静かにわたしたちを用いて行われていくのです。

そしてその神さまの御心のままに、イエスさまはこの後十字架で死なれました。55節に「ユダヤ人の過越祭が近づいた」とあります。ヨハネ福音書ではこの過越の食事を弟子の足を洗う、洗足の話と結びつけておりますが、他の福音書ではこの過越の食事を最後の晩餐の食事として伝えています。過越というのは、出エジプトにその記述があります。神さまがイスラエルをエジプトからお救いになられる時に、犠牲の羊の血を塗った家を災いが過越して行っただけで済んだ。そのようにイエスさまが過越の犠牲の子羊としてささげられることによって、わたしたちが受けるべき神さまの裁きが過ぎこされる。そのためにイエスさまは自ら過越の犠牲となられたのです。

イエスさまの十字架は、誰もが目を背けたくくなるような悲惨な十字架の死を経験されました。グリューネバルトという人の描いたイーゼンハイムの十字架の磔刑図は有名ですが、イエスさまのお顔は苦痛で歪み、腕がねじれ、肌もどす黒く、これほどの悲惨な十字架の絵はないと言われます。けれどもその絵は重い皮膚病患者専門の病院にある祭壇画でした。患者たちは自分の病、苦しみ、その運命を呪ったでしょう。でもその彼らがイエスさまの十字架のお姿に自分を重ね合わせて慰めを受けたと言われています。その苦しみの中に入れ、共におられるイエスさまを見たのです。それは魂の一番深いところで人々を慰めるものとなりました。

クリスマスを迎えます。イエスさまはこの闇の世に、わたしたちの苦しみ、悲惨の渦巻く世界に、汚い人間の思いの支配するわたしたちのところに入ってきてくださいました。そしてすべてをご自身が担われ十字架で死んでくださり、そこから「ラザロ、出て来なさい」とわたしたちを命の中へ呼び出されるためによみがえってくださった。これを御心としてくださいました。この救いが始められたクリスマスと共に祝いましょう。

天の父よ。イエスさまの十字架のお姿をわたしたちの心に刻ませてください。わたしたちの苦しみ、痛み、悲しみの中にもあなたが共にいてくださることがわかりました。何よりそのためにクリスマスの出来事が起こりました。その恵みを感謝し喜びを持ってクリスマスを迎えることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。